

よりよい「生」の一考察  
—車椅子バスケットボール選手の生活観を手がかりに—

A Study of Fruitful life  
—through the result of survey on the lives of wheelchair basketball athletes—

中道莉央\*

NAKAMICHI Rio\*

論文要旨

これまで社会は大多数を占めるマジョリティグループ（障がいをもたない人びと）を中心に発展し、その暮らしは経済的、物質的に豊かになった。他方、マイノリティグループ（障がいをもつ人びと）はこの豊かさのもと「共生社会」の意識の浸透と高まりもあって、その「生」はかつてない社会的平等・機会の均等が保証された「生」に変わってきた。そこで、本研究では障がいをもちながらスポーツ（—ここでは車椅子バスケットボール）に取り組む選手を対象にして、生活観（—日々の暮らしで何を感じ、何を思い、どのように「生」を営んでいるのか—など）を調べて、障がいをもつ人びとからみた人間のよりよい「生」をめぐる若干の考察を試みた。

1. はじめに

かつて障がいをもつ人のスポーツはリハビリテーションの一環としてはじめられた。そして、今日のパラリンピックに象徴されるような高水準の競技スポーツとして行われるようになった。なかでも、車椅子バスケットボールは国際バスケットボール連盟（FIBA）が公認している有数の世界的競技スポーツとなっている。障がいをもちながらスポーツに取り組む人が愛好者から勝敗を競う競技スポーツに挑戦する競技者の段階に至る過程は障がいをもたない人のそれとは大きく異なる。障がいをもつ人の挫折感と身体との葛藤などの苦悩は図りしれない。このことが障がいをもつ人の「生」のエネルギーとなり、障がいをもつ自己の存在を認める原動力（こころの発条）となっているのではないだろうか。つまり、障がいをもつ選手が競技スポーツに打ち込むのは障がいを受容し、克服し、自己の存在が誇りとなる新たな「生」を獲得していくことであるといっても過言ではない。

これまで、障がいをもつ人のスポーツに関する研究はかなり行われている。それらを顧みると、わが国の障がい者スポーツ研究は1964（昭和39）年に開催された第2回夏季パラリンピック東京大会（当時は第13回国際ストークマンデヴィル競技大会と呼ばれた）を契機に行われるようになったとされる。当時の障がいをもつ人が行うスポーツに対する認識は「つまるところリハビリテーションの域を超えるものではなく、ごく簡易化された初歩的なスポーツ活動」

程度であった。これを昨今の実態と比すと、まさに隔世の感がある。それを反映したかのように、その頃の研究では障がいの身体的機能回復効果などに着目した報告がある。

その後の1998（平成10）年には、わが国で第7回冬季パラリンピック長野大会が開催された。この大会はわが国における障がい者スポーツの理解と普及、発展に大きく寄与した。これまでの福祉の色合いが濃かったリハビリテーションとしての障がいをもつ人のスポーツを競技としての障がい者スポーツへと転換させる契機となった。そして、これまでの多くの研究の障がいをもつ人がスポーツを行うことへの意義や効果に着目されていたものが、競技そのもの（コート上のゲームや技術の分析など）に移り変わっていった。さらに、2005（平成17）年には日本体育学会がアダプテッド・スポーツ科学分科会、介護福祉・健康づくり分科会の設立・加盟をそれぞれ承認し、これまでの障がいをもつ人のリハビリテーションと障がい者スポーツとを分けてとらえるようになった。また、翌年の2006（平成16）年には、日本アダプテッド体育・スポーツ学会が設立され、障がい者スポーツのさまざまな視点からの一層専門的な研究が発表されるようになった。

これらのことからわかるように、障がい者スポーツがリハビリテーションから離脱し、専門領域としての研究が行われたのはごく最近のことである。しかし、競技としての障がい者スポーツ研究の多くは「競技」に着目したものであり、選手の生活（競技活動と日々の暮らし）という視点

\* 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻（Mukogawa Women's University Graduate School of Education）

からのものはまだまだ少ない。とりわけ、外国選手の実態や日本のそれとを比較した報告は極めて少なく、それもわずかな資料提供の段階に留まっている。また、障がいをもつ人のスポーツは障がいをもたない人のスポーツの後塵を拝したが、その発展経過は主流の男性のそれから支流としての女性のそれが育っていったのが実情である。それは、1960（昭和35）年の第1回パラリンピックローマ大会では女性の種目はアーチェリー競技のみであったことからもうかがえる。女性の障がい者スポーツがようやくその草創期を終え、さらなる発展を目指そうとしているいま、障がい者スポーツにおいても「ジェンダー意識」が深まった。したがって、女性選手を対象とした研究は今日的に大変意義があるものと考えられる。

## 2. 目的

以上のことから、本研究では、国内外の高い競技水準でプレイする女性車椅子バスケットボール選手を対象にすることにした。そこで、障がいをもつ女性選手が日々の暮らしのなかで何を感じ、何を思い、競技活動をどのように生かし、どのような「生」を送り、どのようによりよい「生」を希求しているのかというような視点—つまり、それらを「生活観」と置き換えて、人間がよりよく生きるための手がかりの一端を明らかにすることを目的とした。

さらに、国内外の選手を対象としたのは、人間が抱く「生」の価値は国籍などあらゆるものを超越した「価値の普遍性」を有すると考えたからである。また国を代表する高い競技水準にある選手を対象としたことは、自己実現ともいえる自己の「生」の可能性に極限まで挑戦していると考えたからである。

## 3. 方法

具体的には、2008 国際親善女子車椅子バスケットボール大阪大会に出場したオーストラリア（以下、AUS と記す）、カナダ（以下、CAN と記す）、日本（以下、JPN と記す）、アメリカ（以下、USA と記す）の4カ国の選手を対象にアンケートによる調査を行うことにした。外国の選手を対象とするのでデータの収集に言語上の制約が生ずることを考慮してインタビューではなくアンケートのほうが適切と考えた。また、その設問内容はアメリカの E・K・スコルディリスが行った研究で用いている設問と照合して<sup>(15)</sup>、妥当性を検討し独自に作成したものを使用した。この独自に作成した設問項目を用いた理由は、選手の生活観を浮き彫りにし、より実態に迫っていけるような設問を作成することが必要だと考えたからである。さらに、アンケートに回答する選手の時間的拘束に配慮して、設問は極力端的な表現とし、選択式とすることにした。

本研究の目的を達成するための選手の競技活動と日々の暮らしとの関わりなどの様子に迫る次のような全 11 問か

らなるアンケートを実施した。

1) なぜ、障がいを有しながらスポーツをすることを選んだのか、2) どのようなきっかけで車椅子バスケットボールをはじめたのか、3) これまでの活動を通じて、どのような効果があったと思うか、4) 今後競技活動を続けていくなかで、どのような心配や不安を感じているか、5) プレイヤーのあなたにとって、車椅子バスケットボールとは何か、6) 国の福祉政策について希望することは何か、7) 生活の広がり・質（QOL）の向上として、期待することは何か、8) 車椅子生活において、必要な情報はどのような手段で入手しているか、9) 外出先などで不便や困難を感じた場合、どのように解決しているか、10) 日常生活のなかで、充実感を感じるときはどのようなときか、11) 競技生活を終えたあと、これまで費やしてきた時間を将来的にどのように過ごすかと考えているか。

この設問の回答方法として、各設問に三つの選択肢を用意してそのうち最も当てはまるもの（該当度の高いもの）順に1から3の数字を記入してもらった（この選択肢は結果と考察のところを示す）。あわせて選手のプロフィール（年齢、障がいの原因、競技年数等）も記入してもらった。そして、選手から得られた回答結果を日本と AUS, CAN, USA（以下、3カ国と記す）とに分け、用意した三つの回答の第一選択のみを集計し、その結果の比較、検討を試みた。

なお、回答は全42名の選手から得ることができた。

## 4. 結果と考察

紙幅が許さないなのでここでは選手のプロフィール及び以下の設問のみに留める。

### 結果と考察—I. プロフィールとアンケート結果

#### ① 各国選手のプロフィール

年齢は最も高いのが JPN、低いのが USA であった。また持ち点もこれと同様であった。障がいを有した年齢は最も高いのが JPN、低いのが AUS であった。競技開始年齢は最も早いのが USA で、遅いのが JPN であった。競技年数は CAN のみが9年弱（8.6）、その他は AUS（9.5）を筆頭に9年以上であった。

Table.1 選手のプロフィール (平均)

	人数	年齢	持ち点	障害を有した年齢	競技開始年齢	競技年数
AUS	11	25.7	2.7	7.6	16.3	9.5
CAN	10	25.6	2.7	11.7	16.8	8.6
JPN	12	29.7	2.8	14.0	19.8	9.4
USA	9	23.6	2.4	9.3	14.3	9.3
(計)	42	26.4	2.6	10.6	17.0	9.2

② 障がいをもしながらスポーツをはじめたきっかけ

「①今までスポーツをやっていたから」、「②健康によいと思ったから」、「③身の回りのことを自力でおこなうのに役立つと思ったから」の三つの選択肢を用意した。第一選択の回答で最も多かったのは①であり、日本が64%、3カ国が89%であった。3カ国のほうが障がいの有無に関わらずスポーツに親しむ日々が多いように推察される。

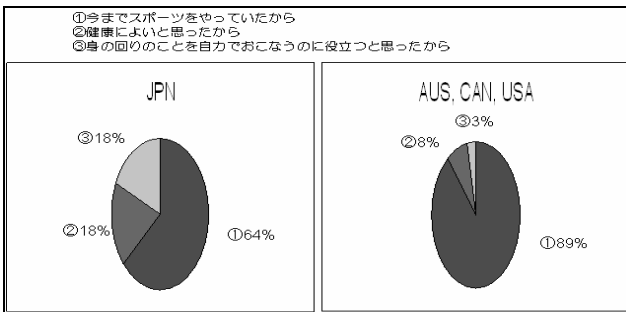


Fig.1 スポーツをはじめたきっかけ

③ 車椅子バスケットボールをはじめたきっかけ

「①他人(たとえば友人など)から勧められたから」、「②障がいをもする前からバスケットボールをやっていたから」、「③車椅子バスケットボールに魅力を感じたから」の三つの選択肢を用意した。第一選択の回答で最も多かったのは①であり、日本が53%、3カ国が61%であった。4カ国がほぼ同じ動機であることを示した。

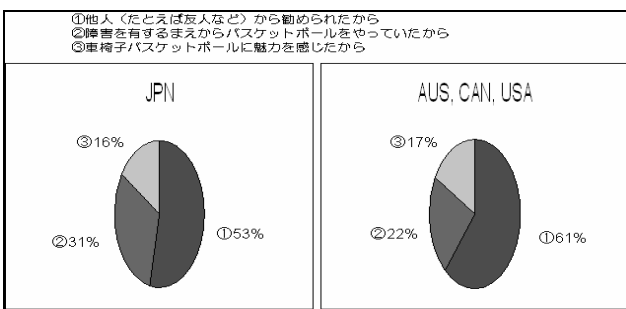


Fig.2 車椅子バスケットボールをはじめたきっかけ

④ 競技活動を続ける上での問題

「①時間・費用の確保」、「②身体的負担」、「③周囲の理解・支援」の三つの選択肢を用意した。第一選択の回答で最も多かったのは①であり、日本が75%、3カ国が49%であった。日本も3カ国も時間と費用の確保が大きな心配となっていることを示した。

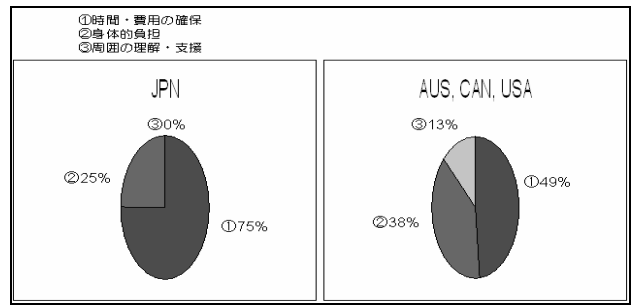


Fig.3 競技活動を続ける上での問題

⑤ 充実感を感じるとき

「①仕事がうまくいったとき」、「②買い物や食事を楽しんでいるとき」、「③家族や親しい人と過ごすとき」の三つの選択肢を用意した。第一選択の回答で最も多かったのは③であり、日本が75%、3カ国が87%であった。日本と3カ国の選手がともに「家族や親しい人と過ごすときに充実感を感じるとき」としたこの結果からは国や年齢、障がいの有無を越え、家族や親しい人と過ごす時間はすべての人間にとっての安らぎであり、充実感を得られるひとときではないかと推察できる。このことは人間だれしものが内在している人間性(こころの安寧という普遍的価値)の一面が吐露されているのではないと思われる。

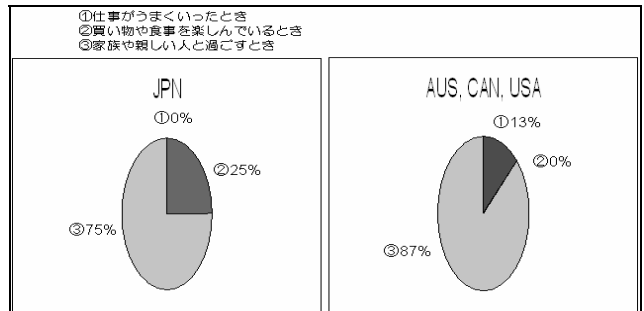


Fig.4 充実感を感じるとき

⑥ 競技活動を終えたあとの過ごし方

「①家事・育児に」、「②仕事に」、「③趣味・他の活動に」の三つの選択肢を用意した。第一選択の回答で最も多かったのは日本が③(46%)と①(45%)で、3カ国は②(53%)であった。日本は教養活動や家庭におけるマイライフを志向しており、3カ国は社会における過ごし方を志向している傾向にある。

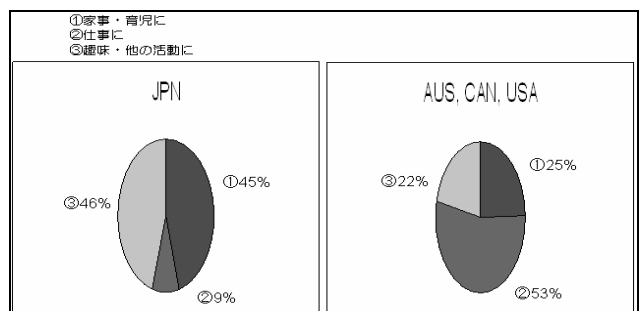


Fig.5 競技活動を終えたあとの過ごし方

これには日本の 59%の選手が仕事に就いているのに対して、3カ国の選手の48%が学生であるという相違に起因しているのではないかと考えられる。

Table. 2 選手の職業 (%)

	主婦	有職者	無職者	学生	無回答
日本	8	59	8	8	17
3カ国	3	33	13	48	3
〈計〉	5	40	12	36	7

結果と考察—II. 日本と3カ国で類似がみられた結果

日本と3カ国との間で類似がみられた回答結果をTable.3に示した。

Table. 3 日本と3カ国で類似がみられた回答結果

番号	設問	日本	諸外国
1	なぜ、障害を有しながらスポーツをすることを選んだのですか。	今までスポーツをやっていたから	
2	どのようなきっかけで車椅子バスケットボールを始めたのですか。	他人(たとえば友人など)から勧められたから	
4	今後、競技活動を続けていくなかでどのような心配や不安を感じていますか。	時間・費用の確保	
7	生活の広がり・質(QOL)の向上として期待することは何でしょうか。	受け入れ態勢の向上(周囲の理解)	
8	車椅子での生活において、必要な情報(利用可能な店や駅周辺の情報など)はどのような手段で入手していますか。	インターネット	インターネット 人を介して
10	日常生活のなかで、充実感を感じるときはどんなときですか。	家族や親しい人と過ごすとき	

障がい者が先天的なものであれ(事故を含んで)後天的なものであれ、スポーツを行うことに生きがいや日々の暮らしにおける楽しみを見出そうとするのは、万国共通の思いであることがわかった(設問1)。しかも、本研究で対象とした選手たちは障がいをもつ前に何らかのスポーツを行っていたスポーツ実践者であったこともわかった。また、日本と3カ国は世界でもトップクラスのスポーツ大国であることは他の言を待たない。したがって、この回答選択の一致にもうなずける。つまり、車椅子バスケットボールをはじめのきっかけも(おそらく長年の)「スポーツ仲間」からの誘いによっていることは非常に自然であり、この結果には得心がいく(設問2)。

また、日々の活動における懸念(または心配)はもっともなことではある(設問4)。なぜならば、それは、障がい者スポーツの最高峰の大会であるパラリンピックでさえもその運営資金問題は重要課題になっていることが指摘されているからである。このことは、障がい者スポーツを行うすべての人に及ぶ問題であるといえ、それは国際的な課題であることが明らかになった。日本では、日本オリンピック委員会(JOC)は文部科学省管轄のスポーツ組織であるが、日本パラリンピック委員会(JPC)は厚生労働省管轄のスポーツ機関であり、それゆえにパラリンピックはオリ

ンピックと同様に「スポーツ」であるとするより、リハビリテーションの延長に位置づけられる「福祉」や「医療」の一部であるとみなされてきた経緯がある。確かに障がいをもつ人のスポーツには、福祉や医療の一環としてのリハビリテーションの側面も存在するが、今日のパラリンピックは医療的リハビリテーションの領域をはるかに超えた相当の競技レベルに達しているといえる。今後、パラリンピックが「医療的リハビリテーション」という既存概念を払拭し、文部科学省の管轄下に入ることによって「競技スポーツ」としてさらに発展していくことが考えられる。そして、その運営資金の充足も図られ、また、社会が「車椅子バスケットボールは下肢や脊髄に障がいをもつ人が行うスポーツ」という認識ではなく、一つのスポーツとしての「車椅子バスケットボール競技」と改めることがこれからの発展につながるものと考えられる。こうした実態のもとでの今後の懸念(心配)が「時間と費用」であることは注目に値する。

障がいをもつ人が生活を広げ生活を充実させるために「周囲の理解」を望み(設問7)、そのために必要な情報は専ら「インターネット」を利用し入手することももったもな感があり(設問8)、現代社会と障がいをもつ人とのつながりを率直に代弁した結果ではないかと考えられる。また、「家族や親しい人と一緒の場」を日本の選手も外国の選手も回答順位が同じであることには何かしら「ほっとする暖かさ」を感じさせられる(設問10)。高い競技水準で優る者が勝ち、劣る者が敗れるという冷酷さに立ち向かい、プレイする女性選手たちであるが故に(男性選手も同じではないかと想像できるが)世界の国々の人間たる共通の証としてのヒューマニティ(人間らしさ)を感じさせる。

5. 結論

このような調査結果から、今回対象とした女性車椅子バスケットボール選手がその競技活動と日々の暮らしのなかで、よりよい「生」に向け希求していることには次のようなことが考えられる。

1. 障がいをもって誕生した人も誕生後に障がいをもった人も、車椅子バスケットボールをはじめの前から、何らかのかたちでスポーティングライフを確立している。
2. 周囲に胸襟を開けるスポーツ仲間(よき理解者)の存在があり、障がい者スポーツを実践する環境が整っている。
3. 活動水準が高まれば高まるほど派生する生活への影響(時間・費用への心配など)は避けられない。活動水準と個々の生活との隔たりのジレンマが生じるおそれが垣間みえる。
4. 障がいをもつ立場から社会に生活に対して、公的施策(バリアフリー化など)の一層の促進を願っている。

5. 日々の暮らしにおいて心を満たし、癒せるのはやはり血が通い合う間柄や気がおけない間柄の存在である。

人間が生きるということは、その本性において主体的であり、この生きようという主体的な欲求を外から押しつけることはできない<sup>(8)</sup>。また、人間は生きている間中、よろこびを与えてくれる存在を必要とし、それなくしては生きがいを失ってしまう<sup>(8)</sup>。このよろこびは主体性と深く結びついており、ともによるこびを分かち合い、自分を支え受容してくれる社会やその存在があつてはじめて人は自己の存在を肯定的にとらえ、生きてゆける。この場合、障がいをもつ、もたないといった表現はまことに皮相的分類にしか過ぎないといえる。ましてやそこには国籍、年齢、性別などといった面からの隔たりは存在しない。

また、障がいをもつ女性選手の日々の活動の取り組みは、(あたかも憐れみで)「授けられるメダル」から強烈な競り合いで勝負して自らが「勝ち取るメダル」への転換の歩みであった。これを敢えて解釈すれば、スポーツによって障がいをもつ人びとは受動的な「生」の域を克服し、自らが挑戦して手中に収める能動的な「生」へと変化したとも考えられる。しかも、それは障がいの有無やその軽重を超越した「生」のありかたにはかならない。

ところで、「スポーツ (sport)」という言葉はもとは「ディスポート (disport)」がその語源となっている。この「ディスポート (disport)」の“dis”は「～から離れて (away)」，“port”は「…を運ぶ (carry)」を意味しており、これが一つの言葉となって「気晴らし、気分転換」を意味する語となった。そこから、「ディスポート (disport)」の頭の“di”が消失して、現在の「スポーツ (sport)」となった。つまり、本来のスポーツの意味は気晴らしや気分転換のことであり、それが今日ではその活動自体を総じてスポーツと称すようになった。それゆえ、スポーツを通じて気晴らしや気分転換をすることは、「よろこび」や「楽しみ」を求めていることになる。これは、スポーツを行うすべての人が平等に享受するものであり、スポーツのもつ性質はどのような人間であれ、等しく同等の権利として与えられているということの意味する。

このようにスポーツのもつ本来の意味に立ち返ると、障がいをもつ人も楽しいからスポーツをする、勝ちたいからスポーツをするという障がいをもたない人がスポーツに取り組むことと何ら変わりのない思いのあることがわかった。つまり、人びとがスポーツから享受するものは同じであり、スポーツは障がいをもつ自身を忘れさせる働きをもつものであり、また障がいをもつ自身に生きる活力を与えているものといえよう。

近年、障がいをもつ人のことを社会はようやく「挑戦・試す」という意味の語を用いて「チャレンジド(challenged)」と称しはじめたように、かつては「特別な人」としてとら

えることが少なくなった。それが、「障がいをもちながらも社会の一員として、日々の暮らしの中で自己の『生』に力強く挑戦している人」としてとらえられるようになったのである。このことは、これまで障がいをもつ人・障がいのある人という障がいの有無による分け隔てで「障害者」を特別視してきた社会における大多数を占める「健常者」が、障がいをもたない人・障がいのない人としての自己の存在を認識するようになった価値観の変化といえる。だからこそ、「障がいをもつ人」と「障がいをもたない人」という隔てがない、人間として誰にも等しく共通する「存在」や「生」の本質そのものに立ち返る必要があるといえる。ここに、障がいをもつ人の「生」を通じて、障がいをもたない人は「人間性」の回復を試みているととらえることができるものと考えられる。そうであるとするならば、人間としての「生」を感謝とよろこびのうちに謙虚に受け止めることこそが、障がいの有無という差別・被差別を超越した人間の「生」のありかたなのではないだろうか<sup>(7)</sup>。

## 6. 今後の課題

障がい者スポーツにはスポーツを通じて社会に果たすべき本来の大きな使命があつたように感ずる。それは、障がい者スポーツを通じて障がいをもつ人びとが社会に対して自分たちに対する理解をうながし、喚起してきた事実からも見ることができる。本研究で実施したアンケートの結果からは、障がいをもつ人びとが感じている「暮らしやすさ」や「競技に十分に打ち込める環境」にはまだまだ課題が少なくないことが示唆される。しかし、障がい者スポーツはその本来の使命を果たし終え、新たな「ありかた」に踏み出し、独自の道を歩み始める時期にきているのではないだろうか。

すなわち、障がい者スポーツの「グローバル化」と「レベルアップ」は今後とどまるところを知らないかのごとくさらに加速化していくのは必至である。また、その実態は非常に興味深い。これからの障がい者スポーツは一体どこにいこうとしているのか。—。そういう意味では「障がいをもつ人からみた外国も視野に入れた(スポーツを通じた)よりよい『生』」についての本研究の深化は大きな意義があるのではないかと考えられる。今後、可能なかぎり調査対象の増加、設問の検討・増加などの点を工夫してさらに本研究を継続していきたい。また、本研究では四則計算による集計のみに留めたので、統計を用いた分析を取り入れることにより客観化された検証を次への課題としたい。

## 7. おわりに

それにしても、本研究を進める過程で常に脳裏から消えなかったのは、「よりよい『生』」という言葉の外国語(—たとえば英語)での表現であった。「優れた」や「最もよいもの」を意味する“good”や“better”や“best”を用いて、

“life”と組み合わせることには違和感があった。しかし、たとえば佐野史郎(1945-)らが「実りある生活への招待」<sup>(14)</sup>という自著において用いている“Living a Fruitful Life”という表現を手がかりとすると、本研究でも「実りのある」という意味で用いる“fruitful”がもっとも適切ではないだろうかと考えられた。つまり、「よりよい『生』」＝「実り多い『生』」＝“fruitful life”という、成果としての「よりよい」という価値判断ではなく、生きる過程とそこからもたらされた結果や内容としての「実り」を意味するからである。

人間の「よりよい『生』」もまた、単なる他者との比較からではみえてこないであろう。それは障がいをもつ人のスポーツからもわかる。障がい者スポーツがその隆盛をみせたのは、「成果の比較」ではなく、そこに人間本来の「人間性」を垣間見ることができたからであろう。それゆえ、「よりよい『生』」とは他者との「生」の比較やその成果ではなく、その人間その人がどのように生き、生きていくのかと

いう奥深さや広がりの可能性を秘めた「生」に目を向けて、はじめて実現し得るものである。このことが、ひいては人間のよりよい「生」に結実するのではないだろうか。ちょうど、「フルートフル (fruitful)」のものと語である「フルーツ (fruit)」のように、その人生において「どのような実をどのように結びつけるか」ということが「よりよい『生』」に帰結されよう。

#### 付記

- 1) 本研究における結果の一部は、2008年11月9日に開催された第32回日本障害者体育・スポーツ研究発表会において報告している。
- 2) アンケートの実施等について次の各位からご協力を得た。
  - ・日本障害者スポーツ協会
  - ・大阪市長居障害者スポーツセンター

#### —参考文献—

- (1) アルフレッド・スターン著、細川貞雄、船橋弘、小林一郎訳『歴史哲学と価値の問題』岩波書店、1966
- (2) Ann Hall, Trevor Slack, Garry Smith, David Whitson, *Sport in Canadian Society*, McClelland & Stewart Inc, 1991
- (3) Deborah A. Wuest., Charles A. Bucher., *Foundations of Physical Education and Sport*, WCB McGraw-Hill, 1999
- (4) G・R・テイラー著、渡辺格、大川節夫訳『人間に未来はあるか 生命操作の時代への警告』みすず書房、1969
- (5) 磯貝浩久、徳永幹雄「スポーツにおける目標志向性に関する日米比較」『日本スポーツ心理学会』28, 2001, pp. 48-49.
- (6) Jay, Coakley., *SPORT IN SOCIETY Issues & Controversies*, McGraw-Hill Higher Education, 2007
- (7) 神谷美恵子『人間をみつめて』みすず書房., 2004, pp. 123-124.
- (8) 岡田尊司『生きづらさを越える哲学』PHP 研究所, 2008, p. 116.
- (9) 大神訓章、浅井慶一「車椅子バスケットボール競技のゲーム分析」『山形大学教育科学紀要』12(2), 1999, pp. 69-82.
- (10) 小澤敬子、長田久雄「女子車椅子バスケットボール選手の精神的健康について」『健康心理学研究』20(1), 2007, pp. 32-41.
- (11) Ludwig, Guttman.著、市川宣恭監訳、広橋賢次島田永和訳ほか『身体障害者のスポーツ』医歯薬出版株式会社、1983
- (12) 三浦孝仁、松井久美子、片山敬子、越智英輔「車椅子バスケットボール選手に対するアンケート調査」『岡山大学教育学部研究集録』134, 2007, pp. 85-91.
- (13) Robert D, Steadward.著、初山泰弘訳「パラリンピック活動 選手権大会の将来像(要約)」『臨床スポーツ医学』15(2), 1998, pp. 121-125.
- (14) 佐野史郎、古田島綾子著『実りある生活への招待』成美堂、2003
- (15) Skordilis, Emmamouli K., *Comparison of Sport Achievement Orientation between Wheelchair Basketball Athletes and Able-body basketball Athletes*, A Thesis Presented to the Faculty of Springfield College, 1995
- (16) Strohkendl, Horst., *The 50th Anniversary of Wheelchair Basketball A History*, International Wheelchair Basketball Federation, 1996
- (17) 内田若希、橋本公雄、竹中晃二、荒井弘和、岡浩一郎「男子車いすスポーツ競技選手の心理的競技能力に関わる要因」『障害者スポーツ科学』1(1), 2003, pp. 49-56.